

## 序

著者	鈴木 七美
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	102
ページ	1-4
発行年	2012-03-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008606">http://hdl.handle.net/10502/00008606</a>

# 序

鈴木 七美

本書は、第一に、「障害」<sup>1)</sup>をもつ人々が望むさまざまな活動の実現に向けたテクノロジーの開発や支援の工夫が、すべての人にとって暮らしやすい環境を再考し整える「ノーマライゼーション」(ヴォルフエンスベルガー 1982: 51-69)の実践につながることを明示する。誕生から死までのあいだに私たちは、他者やモノによる支えなしには生きられない時期を経験することを考えると、「ノーマライゼーション」を検討することは、すべての人の日常の舞台となる生活環境に関わる課題である。

障害者福祉への熱心な取り組みで知られるデンマークにおいても「障害」は、第一に、すべての人の人生に起こりうる状態と捉えられている。だが、デンマークではこれだけではなく、「障害」の第二の意味として、すべての人が望む活動が可能となるよう環境を整える「ノーマライゼーション」の実現に至っていない社会の問題を示すものとして認識され(野村 2010: 93)、「障害のない社会」を構成する要素が検討されてきた。障害をもつ人々の生活の質を考えることは、マイノリティとしての弱者を社会に包摂するための方策を模索することにとどまらず、生活環境を問い直しすべての人にとって「障害のない」社会を構想するために貴重な素材を獲得することにほかならない。したがって本書では、「ノーマライゼーション」をめざす具体的な実践に関する知見を蓄積することと同時に、それらを「障害のない社会」構想と「ノーマライゼーション」に関する議論のなかに位置づけることを試みる。その際、これらに関する議論の蓄積と実践で知られるデンマークの状況に関しても素材を提示する。

第二に本書は、そうした「ノーマライゼーション」を検討・開発する現場にせまり、当事者を含め多様なかたちでかかわる人々が、新たな知見の発見とその共有をとおして変化を経験する過程を照射する。この作業をとおして、「障害のない」社会を構想する場や時間が、仕事や学びなどを含むの人生時間にどのように位置づけられる可能性があるのかをも検討する。「障害のない」社会構想の過程が、経験の共有と人々の変化をとおして、「生きること」や「生きる場」を問いなおす時空間として醸成される様相を照射する。

本書の構成は以下のとおりである。

第1章「多様性理解が育むウェルビーイング—高等教育のユニバーサルデザイン化と人材育成」(佐野(藤田) 眞理子)は、大学という学びの場を舞台とする障害者支援の展開を検討する。障害のある学生が十全に学ぶことができるようサポートを工夫することを出発点として、障害者のウェルビーイングを考えることが、かかわるすべての人のウェルビーイングを問うことに他ならないことを明示する。そのうえで、当事者の希望を

生かしてサポートを開発する場が、社会を構想する場として展開する様相を照射する。社会を構想する力と協働の方法を大学で学ぶ具体的な時空間を描写することをとおして大学の役割の可能性を示唆する一方で、1つの社会ともいえる大学で行われる学びがそのまま社会構想に繋がることを指摘する。

第2章「重度重複障害者の『ウェルビーイング』と技術—社会福祉法人訪問の家『朋』の実践をめぐる考察」(田坂さつき・生田日昭彦・水谷光)は、重度重複障害者が求める「ウェルビーイング」とそれらを実現する技術の創出と実践を検討し、実践の場である「訪問の家」の状況がどのように展開したのかを辿る。「訪問の家」における実践にかかわった学生たちが、暮らしの場、すなわち障害者を含めすべての者が位置づく場について考え、環境を変えてゆく力を醸成してゆく経過について考察を加える。

第3章「難病患者の遠隔地間対面コミュニケーションと技術ピアサポート」(日高友郎・水月昭道)では、移動が困難な難病患者が遠隔地の人々と対面でコミュニケーションするために、さまざまな立場にある人が当事者とともに多様なレベルの技術を開発する過程を検討する。日々その生のありかたが変化してゆく進行性疾患の患者が求める対面コミュニケーションは患者にとっていかなる「ウェルビーイング」を構成するのか、当事者の希望を実践に生かす協働、そして、「具体的な教育者」と表現される被支援者とともに技術開発するピアサポートの展開と意味について考察する。それは、「患者の生にひきつけられる」人々がともに生き方を広く社会に伝えることであるという。

第4章「デンマークにおける『障害のない社会』構想とノーマライゼーション—余暇活動としてのフォルケホイスコーレの展開」(鈴木七美)では、人生において誰もが立ち止り学び直すことができる生涯学習の1つの場として構想されたデンマークのフォルケホイスコーレ(国民大学)の展開から、余暇活動の重層的な意味について検討する。なかでも知的障害者とともに暮らし学ぶ場として展開されたフォルケホイスコーレに注目し、すべての人の活動に配慮した「ノーマライゼーション」の実践を重ねて得られる「障害のない社会」構想にむけた余暇活動の意味あいについて考察を深める。

第5章「ウェルビーイングの視点からみたデンマークの市民社会」(野村武夫)は、社会福祉国家として知られるデンマークにおける「ウェルビーイング」の意味に関する議論を検討し、これを実現する協働の技術の醸成過程について考察する。このことは同時に、デンマークで重視されてきた「障害のない」社会に向けて、すべての住民がさまざまなかたちで「ノーマライゼーション」の実践に参加するという考え方がいかに共有されてきたのかをデンマークの市民社会の歴史の中を探り、ノーマライゼーション理論に関する基盤的知見を提供する。

なお本書は、2008年度機関研究「ライフデザインと福祉(Well-being)の人類学—多機能空間の創出と持続的活用の研究」(国立民族学博物館 社会と文化の多元性領域)の成果公開国際ワークショップ“Thoughts on Well-being and Citizens Working Together:

Alternative Care Practices in Canada and Denmark” (2009年2月27日 於国立民族学博物館), および国際フォーラム「ライフデザインと福祉 (well-being) の人類学—開かれたケア・交流空間の創出—」(2009年2月28日-3月1日 於立命館大学 主催: 国立民族学博物館/立命館大学グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点・立命館大学生存学研究センター 後援: 広島大学/日本文化人類学会/日本カナダ学会/特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会/毎日新聞社)で議論したことを出発点としている。なかでも, 第1セッション「人にやさしい社会の創生に向けて—大学からの情報発信と人材育成—」, 第4セッション「技術と障害からはじまるコミュニティ・デザイン」, 第5セッション「オルタナティブ教育とライフデザイン」において報告された内容に関し, 科研「少子高齢・多文化社会における福祉・教育空間の多機能化に関する歴史人類学的研究」(基盤B 2009-2011 研究代表者: 鈴木七美), 共同研究「ウェルビーイング (福祉) の思想とライフデザイン」(国立民族学博物館 2008-2011 研究代表者: 鈴木七美)において検討を続けてきた。その過程で浮上した観点, すなわち障害のない社会に向けたノーマライゼーションについて検討し議論する場にすべての人が参加することを可能とする諸要素, つまり自らが暮らす場を創ってゆくことにかかわる時空間を人々の日常生活にどのように位置づけるのかについて, 機関研究プロジェクト「ケアと育みの人類学」(国立民族学博物館 2011-2013 研究代表者: 鈴木七美)において中心的課題の1つとして考察を深めてきた。それは, 弱者としての他者のニーズに応えるという対処にとどまるものではなく, すべての人が暮らしやすい場を構想し創ってゆくために, 十分な時間や場を人生においていかに確保できるのかという問いにつながっている。

本書に登場する, 支援を必要とすることがらについて考える人々は, 支援者/被支援者という立場に明確に分けられることなく, それぞれが変化しつつ生きる人間としてかわりあっている。実践の場で議論されることや試みられることが, かかわる人にとってどのような意味をもつかが探求されている。これらをとおして, とともに生きることにかかわるケアの様相を検討し続けるための素材が蓄積されてきた。本書において照らし出されるのは, 他者へのケアのみならず, 自らや環境へのケアを構想することをおして, 人々が生きる場を創ることに参加する具体相である。

## 注

- 1) 「障害」にかかわる表記については, 議論が続いている。近年, すべての人が生を开花できるように環境を整えるという「ノーマライゼーション」の理念が目されるなかで, 「障害者」という表記は個人に問題があるという印象を与えるおそれがあるという指摘がなされ, 「障がい」・「障得」・「しょうがい」などの記載がみられる。他方, 表記の変更だけを行っても, 実践が伴わなければ意味はないという主張もある。

本稿では, デンマークにおいて「ノーマライゼーション」の方向性を見い出せない状況を

社会における「障害」と捉えている状況をとりあげることによって、「ノーマライゼーション」の意味を明確化したうえで、「障害のない」社会をめざす具体的な実践を述べている。さまざまな議論を念頭におきつつも、社会を形容する語としての「障害」をも視野に取める本書では、「障害」という表記に統一した。詳しくは、本書第5章（鈴木七美「デンマークの余暇活動における学びの意味—知的障害者とともに暮らし学ぶフォルケホイスコーレの展開」）をも参照。

## 文 献

野村武夫

2010 『「生活大国」デンマークの福祉政策— ウェルビーイングが育つ条件』京都：ミネルヴァ書房。

鈴木七美編著

2009 『国際研究フォーラム報告書 ライフデザインと福祉（well-being）の人類学— 開かれたケア・交流空間の創出』大阪：国立民族学博物館。

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著

2010 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』東京：御茶の水書房。